

# の森、 の家

安心して住み継がれるまちを目指すために、海拔より高い土地が広がる市街化区域西部へ住宅地を誘導する。その鍵となるのが「**「の森」**と**「凸の家」**」である。新たに形成された住宅地は、津島市の旧市街地よりも高い環境性と防災性を備えたものとなる。

## 「の森」

各街区の北西面に「**「の森」**」の防災林を配列する。平常時は、冬季に吹き降りる風から住宅を守り、浸水時には漂流物の拡散を抑えることによって建物の損壊を軽減させる。「**「の森」**」に守られるのは、災害に強い新たな住宅地である。新しい住宅地が造られるにつれ「**「の森」**」は増殖、連続し、津島市の新たな風景となる。

### ○浸水りにくい土地

計画地とするのは市街化地域の西側に接続する低地である。東部に広がる低地よりも1.5m地盤が高いことを生かし、さらに1mのかさ上げを行うことで浸水しにくい住宅地をつくる。

### ○ゆったりとした敷地の住宅地

既存の工場跡や農地などの遊休地を活用する。街区ごとに小規模な土地区画整理を行い、敷地がゆったりとした住宅地を再構築する。狹小な既存住宅地と異なる、大きな土地に住める優雅さが大都市と津島市を差別化する。

### ○防災枠の設置

給水管、避難路、救援塔である。一街区毎に一棟建てる。階上に物資を備蓄し、(下水の無い所には)地下に共同下水槽を設置する。大洪水時には避難タワーとなる。

### ○水に暮らす

既存水路に接続した、雨水調整池となる遊水池を設ける。敷地内の雨水浸透設備の放流先でもあり、水質を浄化させる仕組みでもある。水辺にはデッキや散策路を配置し、親水性を高めて低地の魅力を最大限に引き出す。

### ○都市の集約化

駅を中心とした街並と日常品の物販店を配置し、その外周に大規模店舗、農業地、工業用地を置く。住人が魅力的な歴史資産に触ながら歩いて暮らせるまちを構成し、名古屋近郊の立地を活かして農業への誇りや新産業への門戸を開く。市街地の再構成を図りながら街の力を取り戻す。

## 凸の家

ゆったりとした敷地を生かした一般的な住宅である。浸水時には2階と屋上が避難場所となる。復興時には、2階で一時的な避難生活ができ、復旧の早い、現代の家である。

### ○1階が浸水しても倒れない家

階段室コアを構造壁で囲う。パネル化された外壁が水に流されることで、水の力を受けた面積を減らす。吹き通しのビティ形体になって柳に風の如く、しなやかで丸い強い家を造る。

### ○2階が水屋

伊勢湾台風級（100年に一度の津波級）でも2階が浸水しない階高をとる。階上に浴室、給湯器、空調室外機等の設備機器と共に、非常時にミニキッチン、発電機、貯水槽、備蓄物資、救命ボートを置く。

### ○生活を守る大きな屋根の深い軒

基礎下の地盤は砕石による地盤改良または杭とし液状化に備える。また非常時用の貯水槽を軒側に対して抵抗する質量とし地盤面下に設けて傾きにくにする。

### ○階段室から屋根へ

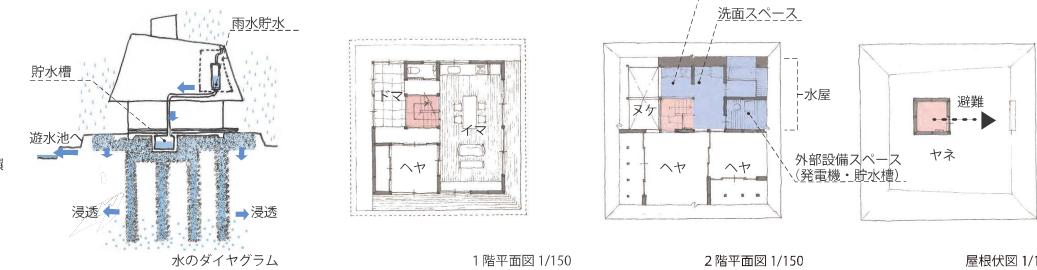
100年に一度の津波に備え、屋上への避難経路を設える。平常時は採光と循環換気の機能をする。天井のフローリングは貯蔵庫にも活用が可能である。

### ○浸水後の復興・復旧を支援する

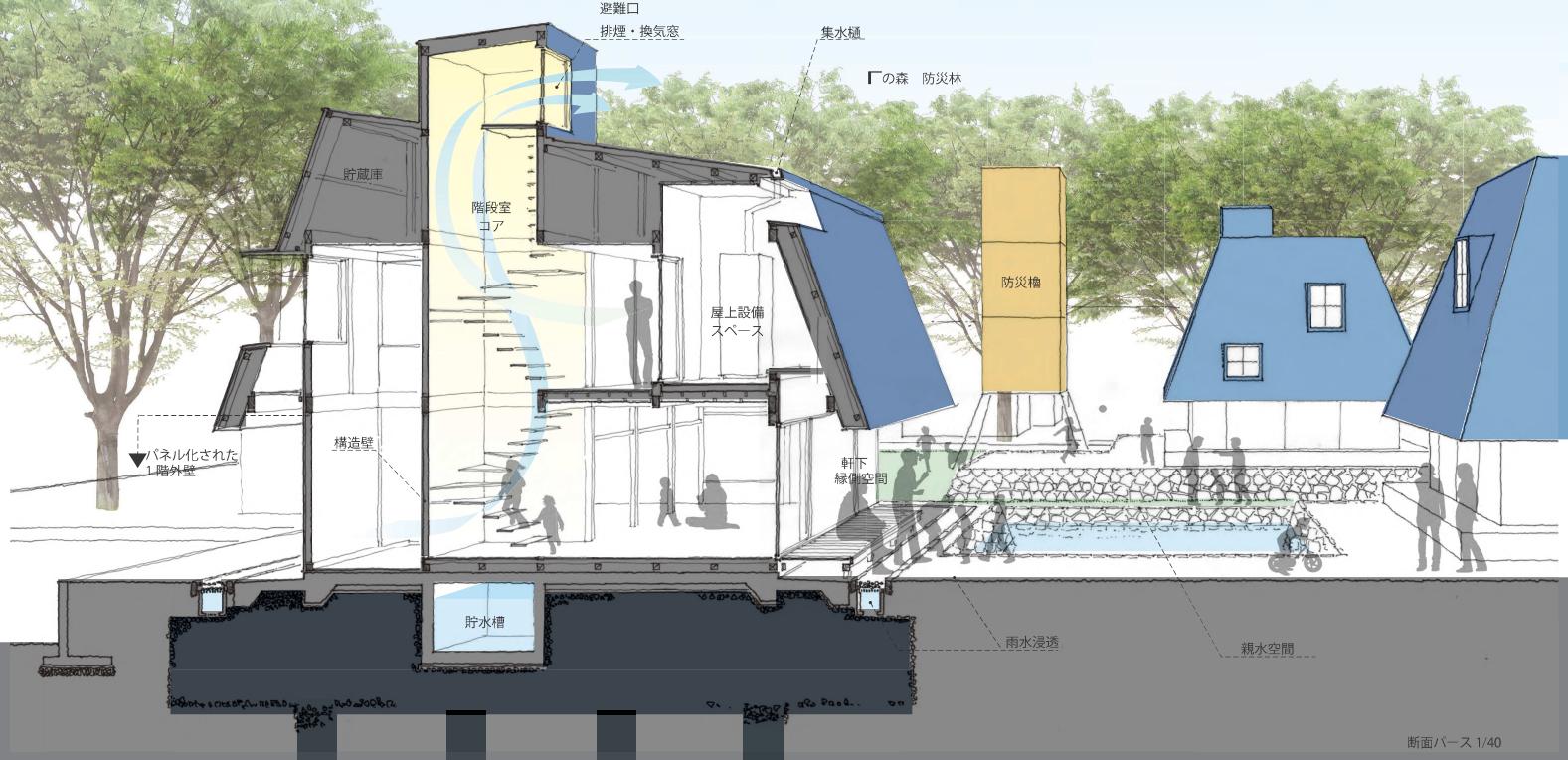
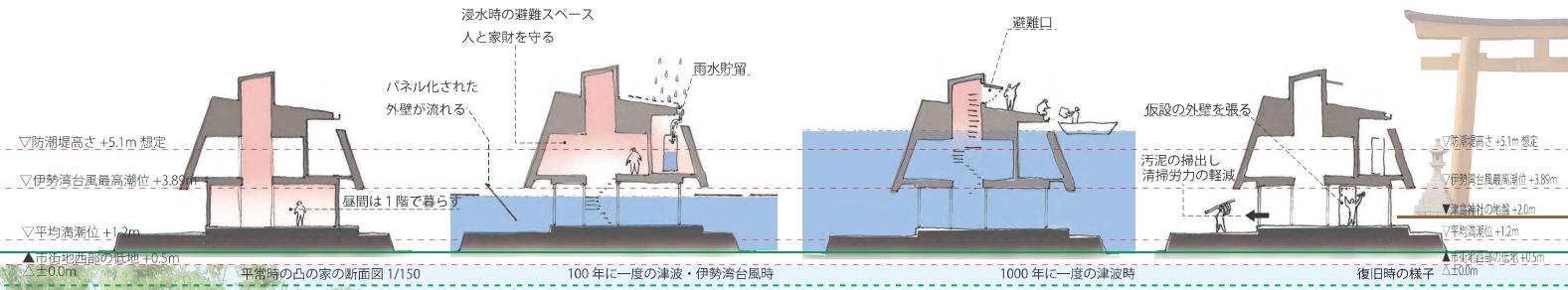
立ち入りの無い基礎は、泥污やゴミの排出清掃の労力を軽減する。独立柱に仮設の外壁として板・シート類を貼ることで避難所にもなり得る。



俯瞰図



屋根伏図 1/150



断面/バース 1/40